

Abstract

過信のリアリズム試論——日ソ中立条約（1941年）を事例として

伊藤 隆太（慶應義塾大学大学院法学研究科政治学専攻後期博士課程）

国家の安危に関わる和戦の決定をめぐり政策決定者が抱く過信は、対外政策の失敗をもたらすとされている。しかし、既存のリアリスト理論は、構造主義やマイクロ経済学的合理性を過度に重視するが故に、こうした過信をめぐるパズルを逸脱事象としている。そこで、本稿は、当該事象を説明すべく、過信の原因とされている楽観性バイアス——肯定的事象が生起する蓋然性を過大評価し、否定的事象が生起する蓋然性を過小評価する傾向——に関する進化政治学的知見によりリアリズムを科学的に強化し、過信のリアリズムという新たなリアリスト理論を提示したい。当該理論は、日ソ中立条約締結（1941年）に至る日本外交を個別事例として検討する中で例示される。本稿の考察を通じて、リアリズムで依然として圧倒的地位を占めるネオリアリズムに対し、構造や狭義の合理性にとらわれない第一イメージ（個人レベル要因）を重視するリアリスト理論の可能性を示すことができると思われる。

『国際安全保障』第44巻第4号（2017年3月）58—73ページ。